

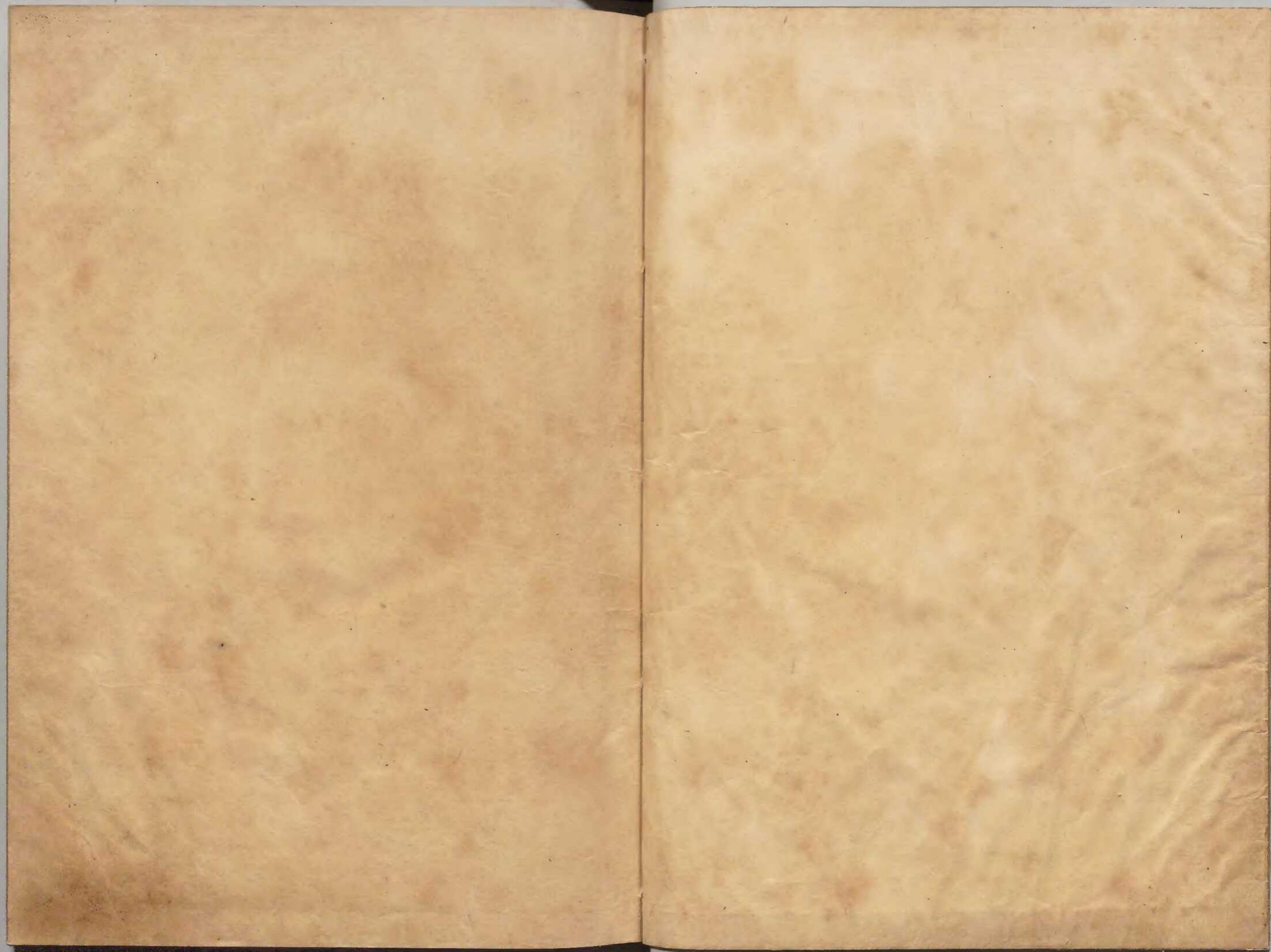
寛永諸家譜

清和源氏西四冊之内  
義家流之内義時流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186 ( 21 )
函號	76 1









石川

寛永諸家系圖傳

法和源氏

丙三

義家流

義時流

石川

石川の...  
陸奥守源義家五男

● 義時

陸奥五郎

石川清尉

浅草文库



義基

下総持者 武蔵守 浪五郎下

河内守石河郡守

治承五年の壬辰義基をひびき子義直

東へひきおしおれ物御小属せん

二月平家方より源を更判友季貞持

判友感化とほりてこゝ余孫とて

石河の城とせしむ時義基少せごたけ

城守れ共しけし百騎の衆たり  
おせく小たよりわくして義基討死す

義資

長清尉 百刀祖 二條院判友代

義廣

母院次宿 緋戸祖

義直

石河判友代 長清門尉 河内守正五郎下



院昇殿 後白河院小治人

治承五年二月又義基と同日く石河

の城とまりり平氏れまとおたひく

とろろいけとろとろ

義宗

大学助 板金之部く早う寸

頼房

右馬頭 正五位下 右馬右衛門 内昇殿

土御門院小治人

頼清

左秋門院存人 判友代

義信

義貞

修理亮

義通

和連門院存人 右河内守



忠頼ちゆうらうのしむめとのめとら

忠教ちゆうけう

式部丞

漢位下

忠頼ちゆうらう

左衛門

男子なんしいれちうさうしう外孫義忠と養子とす

政年せいねん

与一

宗泰しゆたい

八郎

義忠ぎちゆう

保吉郎

治部丞

實まことハ和連門院為人義通ぎちゆうケ子

元弘元年げんこう秋あき後醍醐天皇こうたいこ和列われつと



時通

信幸ありて小糸をゆかりんとしてたまふ  
と此才義継がて地小こりうて忠義と  
りうら死寸義忠がうこふ人回過れきこく  
ありまると小山判友ハ義忠とくうみり  
少ううて實名とたふしんうらまは  
くありんて申こい義忠たむび子忠時  
通おもとちひくくト野山小山小はく

源右衛門

又と申く小山小ありし

朝成

小十郎

女小山下遊高胡女 石河氏と改て  
小山と称寸二頭衣色と旗着希の紋  
輪の月れ藤とつくうへ紋



氏房 うぢふらう

小山五郎

泰信 たいしん

小山新五郎

政康 せいこう

下野守 しもとのしゅ

文安年中本朝も蓮如上人下野入りて  
せんぶんねんちゅうほんていもれんがうじょうじんしもとのいりて  
 政康も何れも下野入りて  
せいこうもなんどしもとのいりて  
 少く我門徒のうら小武されおとて  
すくわがもんたのうらこぶたれおとて  
 一房とちかき人さるの是なり一縁がく政康  
いつぶらとちかきひとさるのこのなりいつ縁がくせいこう  
 三列へさうりて我門徒を返せよと  
さんれつへさうりてわがもんたをかへせよと  
 ありし人政康幼孫にてと今小おとらひ  
ありしひとせいこうのこむすこにてといまこおとらひ  
 三列小よりて小川の城に居候すを  
さんれつこよりてこのがののしろにゐまはるすを  
 本氏小よりて石河と打のる  
ほんぢこよりていしかわとぶちのる



親康 ちかやす

長清尉

松平親忠ちかやす政康まさやすは信のぶく子こどものうらへん  
にほつてきて家老けらうとあもらぬされ旨しよ  
とうけいぬり之男おんな親康ちかやすとをま守まもり  
十四年じよんねんの去さ清しよお小こおわくえ服えんぎ  
これ清しよ律りつの親ちかの字なとくされ家老けらう  
例れいとすぬされはは始は小こおつて源げん之の郎らう

親康ちかやすとなめふ

忠捕 ちか

れをたす

親忠ちかよりなりぬ小忠次ちかぢ自みづか小こ清しよ久ひさ正まさ忠次ちかぢ  
清しよお小こおわくえ服えんぎの付つ清しよ律りつ此この字な  
とくされは信のぶ右みぎ衛ゑ忠捕ちかと号なづすしよ十五じよ年ねん  
忠捕ちか若わか年ねんの比ひ父ちち親康ちかやすが下した知ちとくけく  
とくく小川こがわ小こおししは伯父おじの源げん親康ちかやす長なが



入道とおつりて野寺うれ印地さうし  
沖味方ふまゝいふに役とて親睦  
と安祥れ城へ入る

清道

宗風書

清康君 廣忠卿

東照大権現清三代へ侍人すくく  
廣忠卿の沖時清道清あらくんはれ

清道と支配す

大権現沖道書の四時清道義目の役り

きききき外清幼少の者清めれよ  
くはよ

天文十九年 廣忠卿沖道

大権現はく八軍少く尾列より三列へ

ゆき世たすひくすむら後列よかむせ  
ゆきとまはれすむら人とあつひてけ  
あつこまうら痛除伯耆守とて一少く



津波つなばたより清道きよみちの列りゅう小れこころとまら  
て沙衣さい食く難がたく等らとおとれ人ひと後列ごりゅうへ  
ををとす

家いへ成なり

日向ひがのへ守まも 後ご五位ごいかげ下した

大指おほさし現げん小こは久くも清道きよみち死しして後ご 約やく命めいま  
より家いへ督とくとけく

永祿えいりく三年

大指おほさし現げん尾列おしりゅう樺山かづやまの城しろと甘あまあふるひなひなびお  
回まわ玉たま石いし隙ひまれれはより阿あ比ひのとき家いへ成なり沙さ比ひ先まへ  
て 手てとけけたまはる

同六年どうろくねん三列さんりゅう一向いこう家いへ成なり起たの附つ家いへ成なり一いつ族しゆ  
皮かわつ流ながるふよりてささ敵てきまちららととま  
家いへ成なりの宗そう旨しめと人ひと軍ぐん志しととげげすすととな  
よりて一いつ族しゆのちら味あじ方かたよりつるものものああま

ちりちりとと後ごちりちりといいふふちりちりて沙さ利り軍ぐんの  
後ご東とう三さん河か氏し真まととららよりて山やま中なかのちら



てと家成とくちよりうて歌と對陣たいじん寸長すんちやうは爲  
城じやう一の宮みやの後ご浩こう沛ぱい油ゆの合戦がっせん五井ごせいれを  
此こゝの合戦がっせん小こづ道みちも家成とくち沛ぱい先せん子ことけ  
たまらる

同十一年

大権現おほいけんを列り侍し入い玉たま

同十二年今川氏真いまがはのうぢまことがたてころる熱河ねつがはの  
城じやうとせめたまふ村家成むらぢやう沛ぱい先せん子ことけ  
たびくればせうちいりうは城じやうちういさ

引ひて沛ぱい先せん子こ今いま川がは後ご寸すん長ちやう熱河ねつがはの城じやう家  
成とくち配はい一いつて長ちやう須す是ぜいより為な之の河がは入い家  
成とくちのの繼ついでとせらうて毎まい夜よは先せん子ことけなる  
頭かぶの役やくとむ甥おひ伯はく耆し者しや小こづ道みちづるまるる  
大権現おほいけんれ始はじり引ひて伯耆はくし者しとれとつむ

是こゝより武ぶ家け之の列りの徳とく士し二に名なよはしけり

酒井さかゐは武ぶ家けの尉ゑい女によ人ひとれ繼ついで小こはけらる

元龜げんき三年十月武田信玄たけだのしんげんを列り小こ出で張ちやう

此こゝより地ぢとつむ小こづ道みちづるまるるの



いしかり一經川のそ西香具河れ城を歌こ

から河びが家か色川より

あまをせのく曉よりうて城を

同年十二月之方系合戦の時家か色川

小ぢりうてま小河平野を

引つ

大権現東之河へ津働れはし人殺れ

大場ちると信玄ぶううのう

れ敗軍小す

第もんぶられ

といらるる

天正八年家督と嫡子

はり

長十二年康通病死す家成徳長

めんと

城は居

同十四年十月小病死七十六



康通

たはるを文 公の書 後五徳下

天正八年小家督とほつ津先より

小くしるる

同十八年

大指現開東津入金の刻を習外極のふ

らひ五徳のりく津番とおはあ御上

治のよきハ康通一徳のくを致しく徳を

忠総

孝長五年皇徳承大指の成しく徳五  
万石招致寸同十二年七月病死年五十四

家十郎 主殿以

實ハ大之保相持也忠隣ハ次男 家成

和孫なり

孝長元年

右徳院殿中あ小かわくえ服の時津津

れ忠の字とくするれ家十良忠總と号す



同三年城列とら休やすんん小こより

大指現へへ流ながるるも

同五年

大指現とら京きやう橋はし退たい治ちくくてて下した指さし小こ山やまより

河えをを敷し敷しののとと流ながるる小こ河が一いち流ながるるのの勢せは

佐さ治ちけけららる

大指現とら小こ山やまよりより河がへへ運く津つのの後のち石いし田た治ち治ち

お備おび之の成なり保たも及およぶぶとと九く月げつ朔しやく日にち河がより

沖出島おきだじま同どう十じゅう五ご年ねん關原せきがはらよりよりかかわわるる沙さ合あ戦せん

の時とき忠ちゆう總そう休しゆうます

同年の冬

大指現とら津つおお小こかかわわるる大おほ保ほとと河がよりよりああるる海うみ

とと流ながるるととす

同八年どうはちねん流ながるる佐さ治ち下した日にち叙しよ一いち自みづか殿の以も小こ河がよりよりす

日にち十じゅう四し年ねん祖そ父ふ日にち白はく身み死しす

大指現

名な德とく院いん殿の河がよりより流ながるるとと忠ちゆう總そう石いし川がわの家いえ督とく



と流くぬされ給ふらうて是後水之垣の城  
をぬれす

日十九年正月大久保お控者忠謀に御乳

とくうに列よ是なるゆへ忠謀後府に

町を閉居す

同年大坂を亂のとき

大坂現と意よ忠謀衣川れ家督とほげり

へ實又お控者か孫坐しハ町をぬれす

台漣院殿へ御しけらと清先よれなみり

らいくらり大坂を急へ出張し一月あり  
小五分一のとき出とせめたる十二月卯のゆ  
のの小

右漣院殿よりを夜石見守らる本苑後者と

と使とて忠謀陣場おつじやとの

とらちちら日る城申より他波の橋の如く

人ぬとくしらるを城申へといとて志

がくくろれとらよあるらう

大坂現さくくろれとらよあるらう



之服正とつてくしやくしりたるぬきせぬ  
信とつて申屋よゆるとき

と法院殿より回夜印記を交動せし  
と使

とつて去る信のしよ  
信下る

聖とつての交動札のとき

大権現の信とつけたまはりて持列言擬れ

城とまひる五月ちのりめよへするぬきの

とつて七日の屋色小ゆき鴻とつて京

橋より入るりいたるい首敷二百牛捕

七十人と結す

元和二年駿府少く

大権現御石例の別四月字れぬるふりて

沙寢可へ向作す  
と意よハけんちあ年

とつてはつて石川日向守家成死せぬ

實父相持ち忠隣りける石川長門ち康

通が幼少の子ことちりと志ふりよ申とん

と忠總とつて石川の家とほすぬ

早とつてすむんせんで  
信はけらる



るうれ心申とひくくけくく好向後

台徳院殿へくけくくくくくくくくくくくくくく

大々保松末御と云出うく付大臣は新

田とひくくくくくくくくくくくくくくく

言とくくくくくくくくくくくくくくく

くけくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくく

人控現御使界れ後同年の秋大垣と云く

寛永九年肌後小仕置しはくくくくく  
同十年

同十一年

將軍家御上流の侍も守りし御役は侍下よ  
叙せし向く先祖よりえし御厚恩の如く



トけりも子孫くましく思ふなり

將軍家津重の村跡に津重小幡す

同年依倉とありてあま京師を可れ

伯少くは列願可れ城也

日十四年 子代非若津徳生の時養目

此役と 伯少けらる

成業

日記 後五佐下

實公大原相持と忠隣五男 祖父石川日向也

家成徳若領と石取也

又忠隣沖勅乳と可れ成業因持

元和元年 指列大坂小坂も月也

合戦よ加噴名のもう物と成中橋門よ

下りのこ波と二級と可れ

層橋

宗十郎



寛永十一年十二月せんじゅういちねん没五位下ごんごの小叙せうじゆ彈正だんじやう  
大弼だいびく小叙せうじゆ

総長そうぢやう

信十郎しんじゆらう

寛永十八年かんえいじゅうはちねん 釣合つゐあひ小せう弼びく清せい小せう姓せい組ぐみのの書しよ  
頭かぶととなりなり

同年十二月どうねんじゅうにげつ没五位下ごんごの小叙せうじゆ播磨はりま守まもりり  
仁に寸すん

貞當てんたう

八言はちごんたたりり

お祖おそ母ははのの氏うぢししららふふらら石いし川がはをを河かららりりてて上うへ野の  
とと稱なづ號なづととすす

寛永十年かんえいじゅうねん死し地ぢとと叙じゆ寸すん

同十五年どうじゅうごねん清書院せいしよゐん書しよのの組ぐみ頭かぶととなりなり

同十七年どうじゅうしちねん 釣合つゐあひ小せう弼びく清書院せいしよゐん書しよ頭かぶととなりなり

りり

同十八年どうじゅうはちねん正月しょうげつ没五位下ごんごの小叙せうじゆ河波かば守まもりりり小せう



御守 ごまもり

泰総 たいそう

持七郎 もちしちろう

寛永十七年 かんえいしちねん

命下りて沙書院書れ いのちくだりてさしごういんがき

継入 ついでいり

那総 なそう

五十郎 ごじゅうろう

寛永十七年 かんえいしちねん

命下りてを約 いのちくだりてをやく

はく はく

総氏 そうし

才右衛門 さいゑもん

寛永十八年 かんえいじゅうはちねん

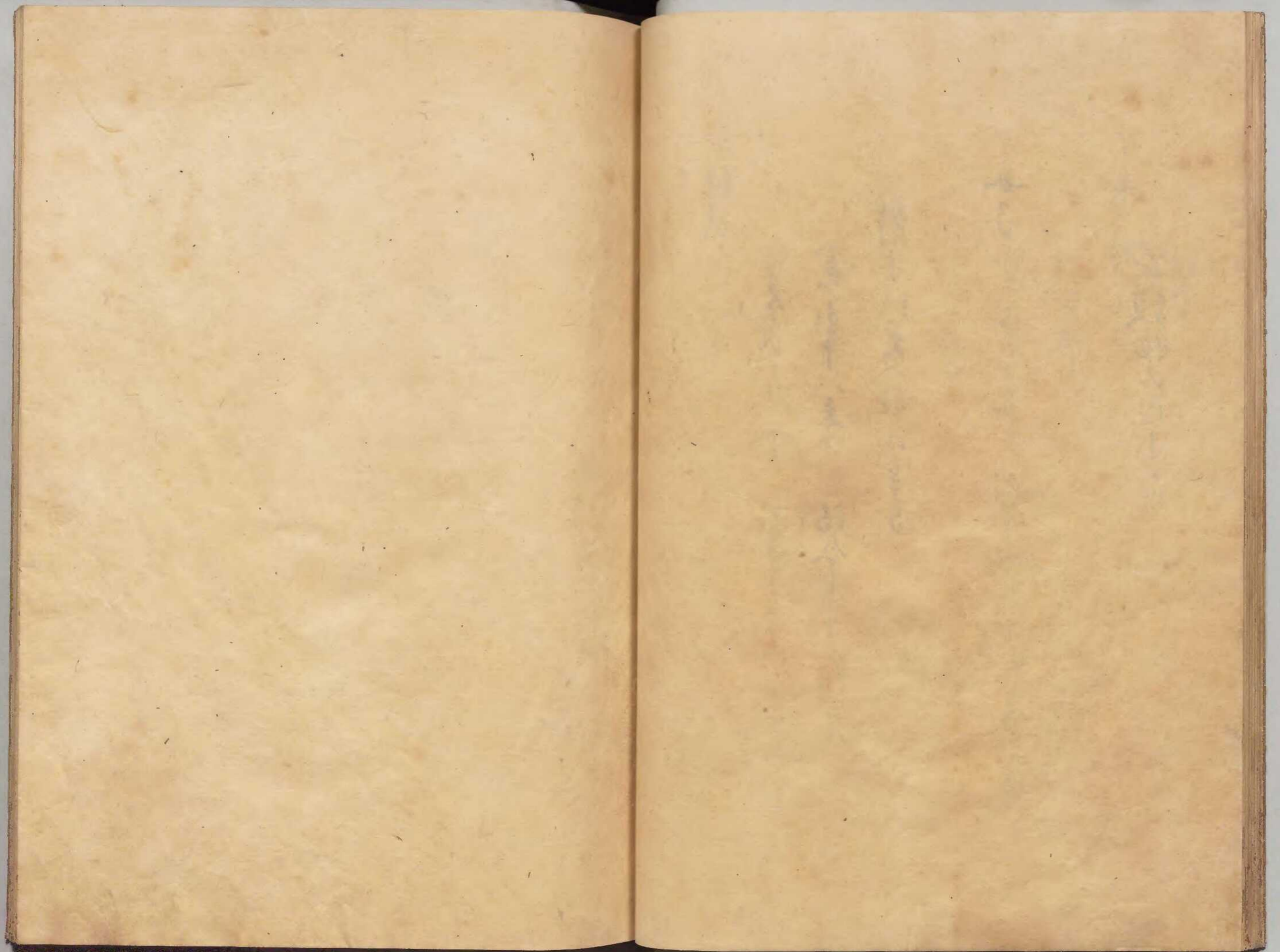
命下りて いのちくだりて

竹子代君へ たけのこしろぎみへ

女子 むすめ

家紋拾の内小藤 そのゑん







● 家成 かぢ

日向守

長十郎ちやうじやうらう法ほふ列りやう大だい場ばう小せうわわくく七しち十じゆ六ろく歳さい  
少せうくく死し寸すん

石川

先祖せんぞのの治ち守しゆ伴ばん小せう石いし川がわ白はく髪かみ忠ちゆう總そう  
系けい圖と小せうくく死し寸すん



康通 やすとむ

白門守 しらかどのかみ

寛永十二年大垣よりわたり年五十四歳  
病死

重成 しげなり

右京亮 みぎのけいりやう

家成が二男としてととも重成幼少なりて  
兄康通より後父家成小しむりて

東照大権現と伝説ありて 約今よりして

家成が孫と伝説ありて 家成の孫と

はぐりて重成浪人となり

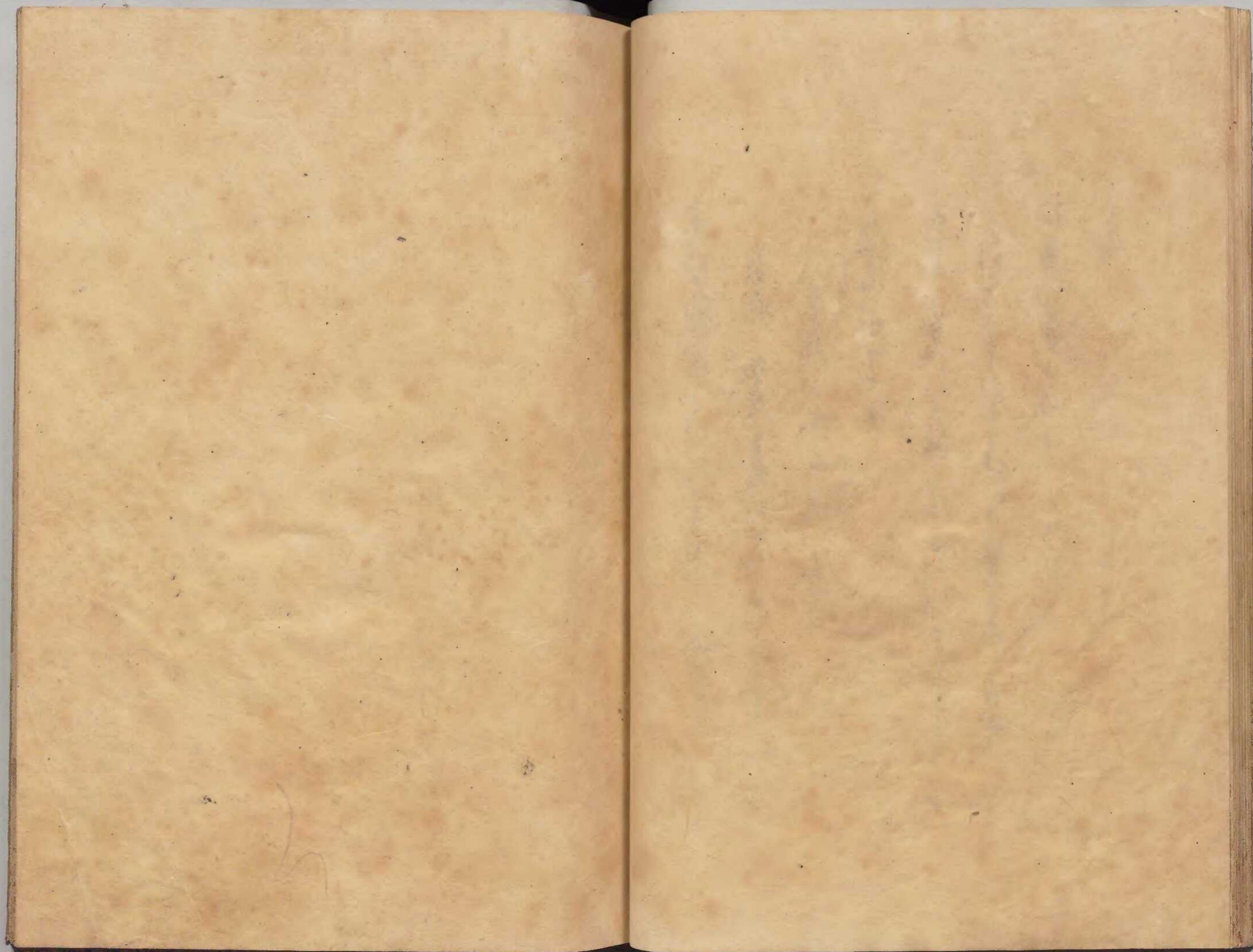
寛永十一年

お軍家沖と伝説ありて 重成道

河より翌年正月より 伝説ありて

お軍家と伝説ありて







政康

石川

先祖せんぞの代よ石川いしかわと安政やすし忠總ちゆうすう系圖

小洋こやうあり

下総しもと 三河みかわ小川こがわ小領こりやう寸

此君このきみ二代にだい申結まをす



重康 チカヤサ

田原の地

生玉之列

重政 チカマサ

又田原

生玉之列

幼少のとき人となりて浪人となり  
一向宗大坂城にたゞるるとき重政  
と城守よりりし時信長多勢と討ち

是とて心して府重政城守よりすしむ

敵三人よりらる敵方重政がしむる

威し度く夫とて夫百歩要脚千之

至無大控現これとてしむる

すむるはよとてこれかもしむる

ひらりほげさるるふらう又之列に

大控現とねしむらうれらぬ

はくす

松平と野分之列長沢の城にたゞる



大指現後城とせりふまゝ重政一書小屏

へりうこいあを結少くほきかまされしを

あひりりらる

大指現津流りまじは忠厚の約命とひ

あふ

三列室小富永まき城とて入城申す

法路とト知しる者あり重政まことんけ

敷りげへーのびらうま者と射たりする

りらうれ着ととんまき一重政まことんけ

けふ夫重政まことんけりらうれのうへに射ぬる

大指現らうこいあを結少くほきかまされしを

とぬるせしむ

まことんけ元年五月廿五日病死八十七歳

法石常順

重次

八尾門尉

三國三列

大指現へはあまれけふまき一重



右徳院殿へはくしむる浄使書の後とける又

也浄書法を所と 給けらる

を列を同浄陣の時武田捨頼の足輕

大ね須友た門と重次と道とらるる

三列、萬が果合我のときさるるあり

天正十二年、蟹江の城は、河川一並たて

こりらとせ

大権現浄を教重次浄をへらる鉄炮

小ありらされども、これ浄へけとめて、小

祇法寺に付も、けらるる 約令

とけけたまはる

あま長十八日十二月十日病死時、五十三歳

法名浄雲

政次

八幡門 生玉三列



政信 まさのぶ

又四郎

生玉武彦 なまたまむらた

重勝 しげかつ

六右衛門尉

生玉三郎

大掾おほのつゝみ現まがとのねのしをりし津つ納のう戸の役やくとの勤つとむ

之後

右徳院殿小侍みぎとくゐんどのこゝしとのしをりし

均ひら命のみこと小こ侍ゝしとのしをりし

清きよ役やくとの勤つとむ後 作しりしつとりて清きよ

膳ぜんとの勤つとむ又津つ核かく目めとのしをりし

右軍家みぎぐんけとのしをりし津つ役やくとの勤つとむ又津つ私し之の

役やくとの勤つとむ

寛かん永えい十じゅう四し年ねん六ろく月げつ八はち日にち病やま死し軍ぐん九く宗そう法ぽう石せき

冷心れいしん

重貞 しげさだ

又十良

生玉武彦 なまたまむらた



寛永九年

將軍家と相しむる

同十九年六月廿七日御書院書とす

重後

比十郎 牛小相列

寛永三年

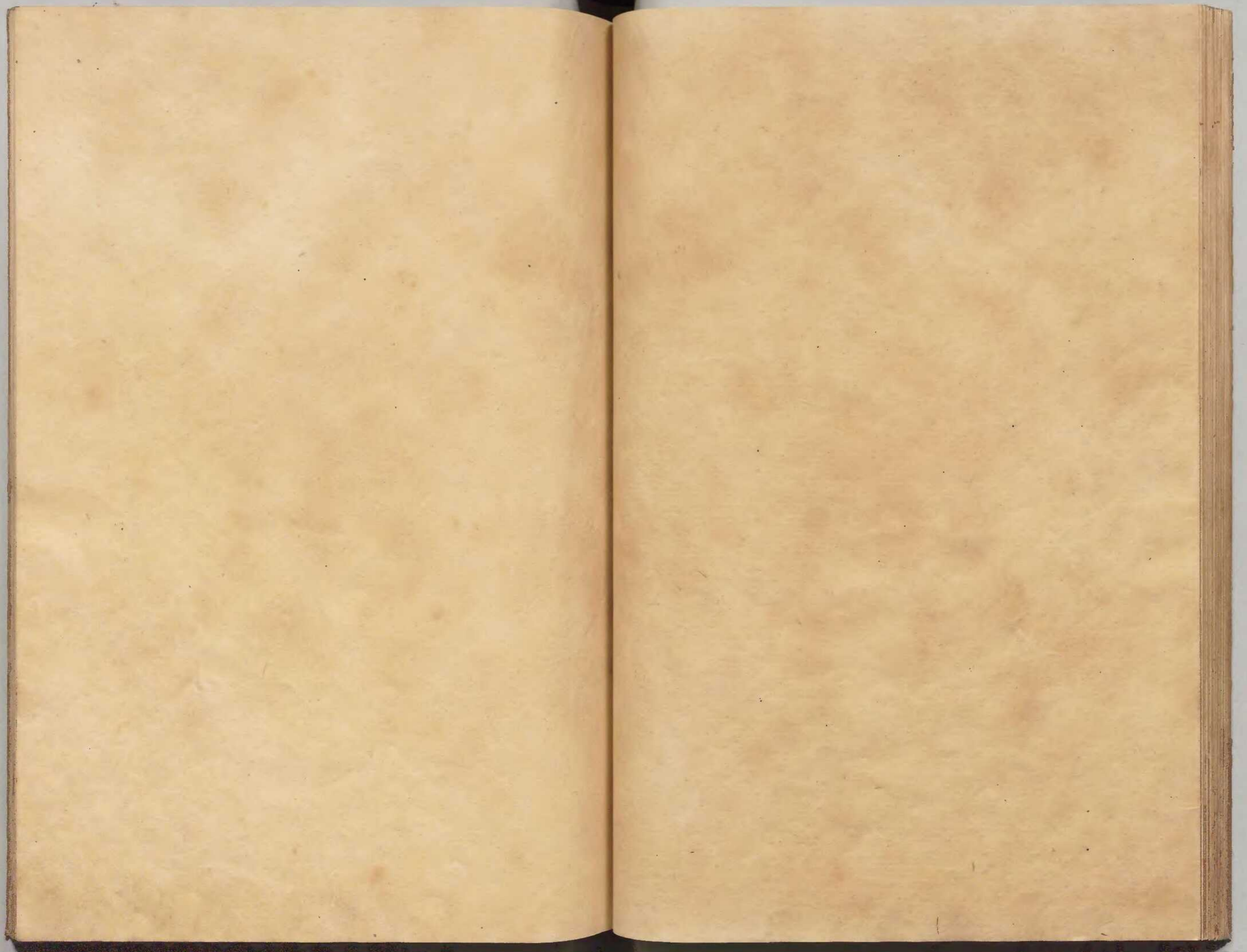
將軍家と相しむる

同四年御書院書とす

同十年御書院書とす

家紋此の同小片葉







石川

● 貴勝 たから

しげゆ  
勅命申上御

しげゆ  
生中母後

吉貴 よしか

かろう  
成吉上御

生中母



貴繁 たかしげ

孫七郎

孫左衛門尉

生玉回あ

東照大権現小江へもる

五十八年少く

死す

貴成 たかしげ

孫左衛門尉

生玉回あ

實まことの赤井あかゐ友左衛門尉ともざゑもん幸長ゆきちやうが子こなり幸長

討死うちしの後ご孫貴繁まことの食け子しなり

長ちやう十五ご年ねん駿府しんぷ小こかかわわく

大権現おほごんげんととわわ獨ひとり一ひと身みりり長ちやう又また貴繁たかしげがが家督けとく

ととほほぎぎ二十にじゅう石いしのの地ぢととわわ死しす

大坂おほさかのの沖おき陣じんにに住すまます

大権現おほごんげん堯たう沖おきのの後ご

右みぎ近衛ちかえ殿のんへへととつつりりてて沖おき書院しよゐんああるるとと勤こゝろむ

寛くわん永えい十じゅう年ねん

右みぎ軍家ぐんけのの始はじとと明あきらりりてて沖おき使しああるる



寛永十一年丁卯加増千石  
此世と能寸

貴政 たのまさ

左次郎 しげ 生玉後列 たまご

寛永十七年 かんえい

將軍家へ仕入るるに後

均令下小徳々 ひと

御書院書と勤む ご

貴定 たのさだ

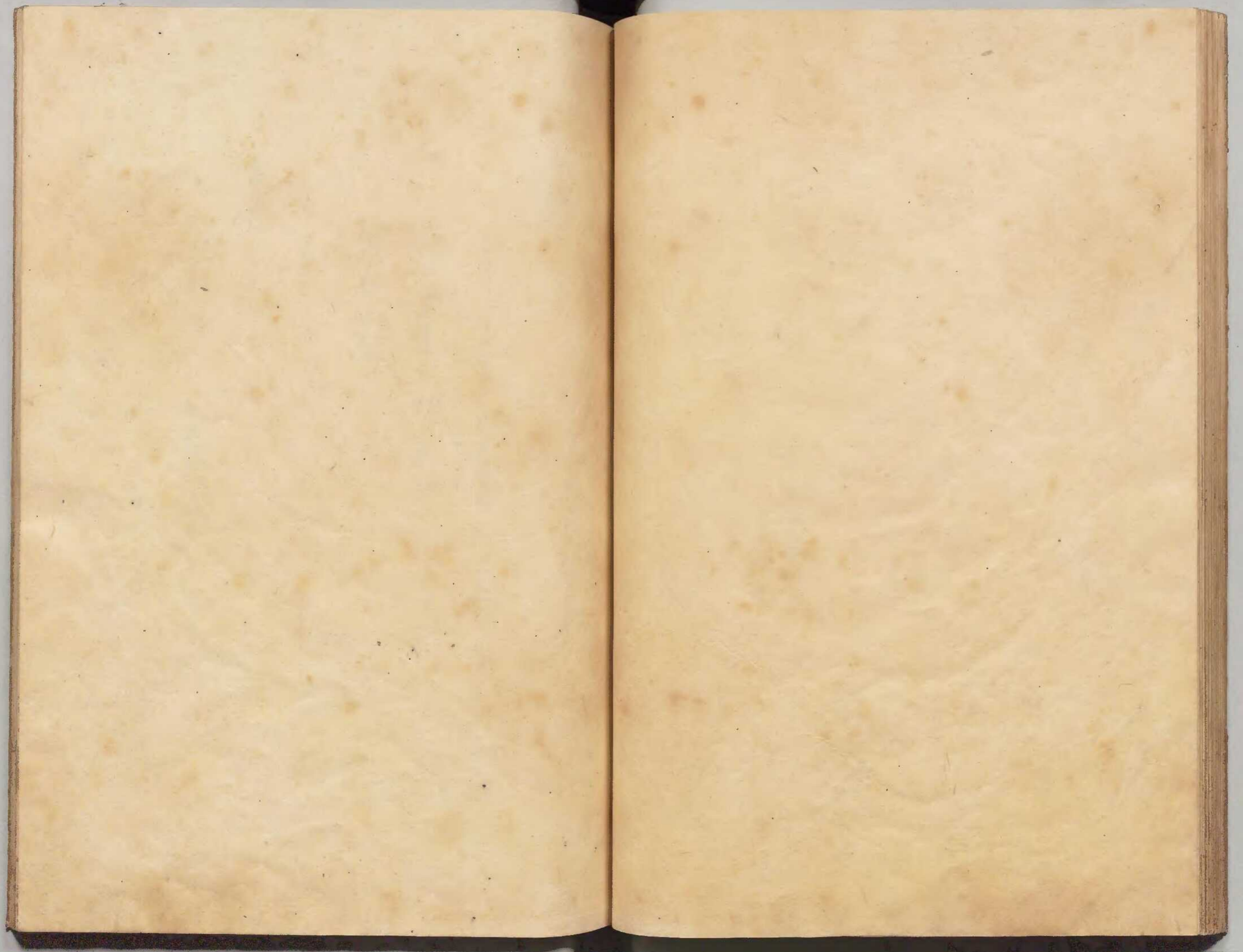
左次郎 しげ 生國武彦 くに

寛永十七年 均令下小徳々 ひと

此世と能寸

家紋二割書 まが







時家 ときや

赤井越前守 あかゐ 且國丹波赤井 あかゐ 又源氏也 げんじ  
母波中玉の押代使 おししろ 八十八歳少く病死 やまひ  
法石小休 はふし

幸家 ゆきや

刑部卿 けいぶ 且國丹波 あかゐ 法石釣月 はふし

幸長 ゆきちか



友方 上田白子

子列演松小かわく

大行現と名錫一書 此小うて酒井た為尉

小うけけらるゝ後小室原に居り尉小けく

信列上田小かわく尉死時小三十五歳

家紋鷹金極子



一政

石川

傳左衛門

自注之河

廣忠卿小治

三列大濱のうら少く地守

法石

伊落



一勝 いちりつ

傳次郎

生玉回廊

天正十八年閏東沖入玉の村回廊とあり

しんぎょのふたはらふらふのふたはらふらふ  
しめ武蔵守と花稻毛辰約村村山とあり

手廻りとあり

寛永十九年六月吉 駒林村小かわり

病死し小七十七歳

一長 いちちやう

次郎長清

生玉回廊

台徳院殿

將軍家より流るる

寛永十二年三月吉 江戸よかわり

病死 古平某 法名あり

一次 いちじ

傳次郎

源五郎某

生玉武蔵



寛永十五年

お軍家とねしもの

同十八年十月廿六日 御小引にて御係之儀

御少く小十人御頭とせらる

家紋丸の目と新膳



●  
正信

石川

半六郎

建永之河

唐忠卿小治久之屋

東照大権現小治久之屋

正俊

半三郎

生玉回子



ひらき  
廣忠卿小治久長後

大権現小治久長

を列まら漢松の城しに討死ちす十二月廿日

なり

正次

まね

まね

大権現小治久長

お軍家小治久長

正重

まね

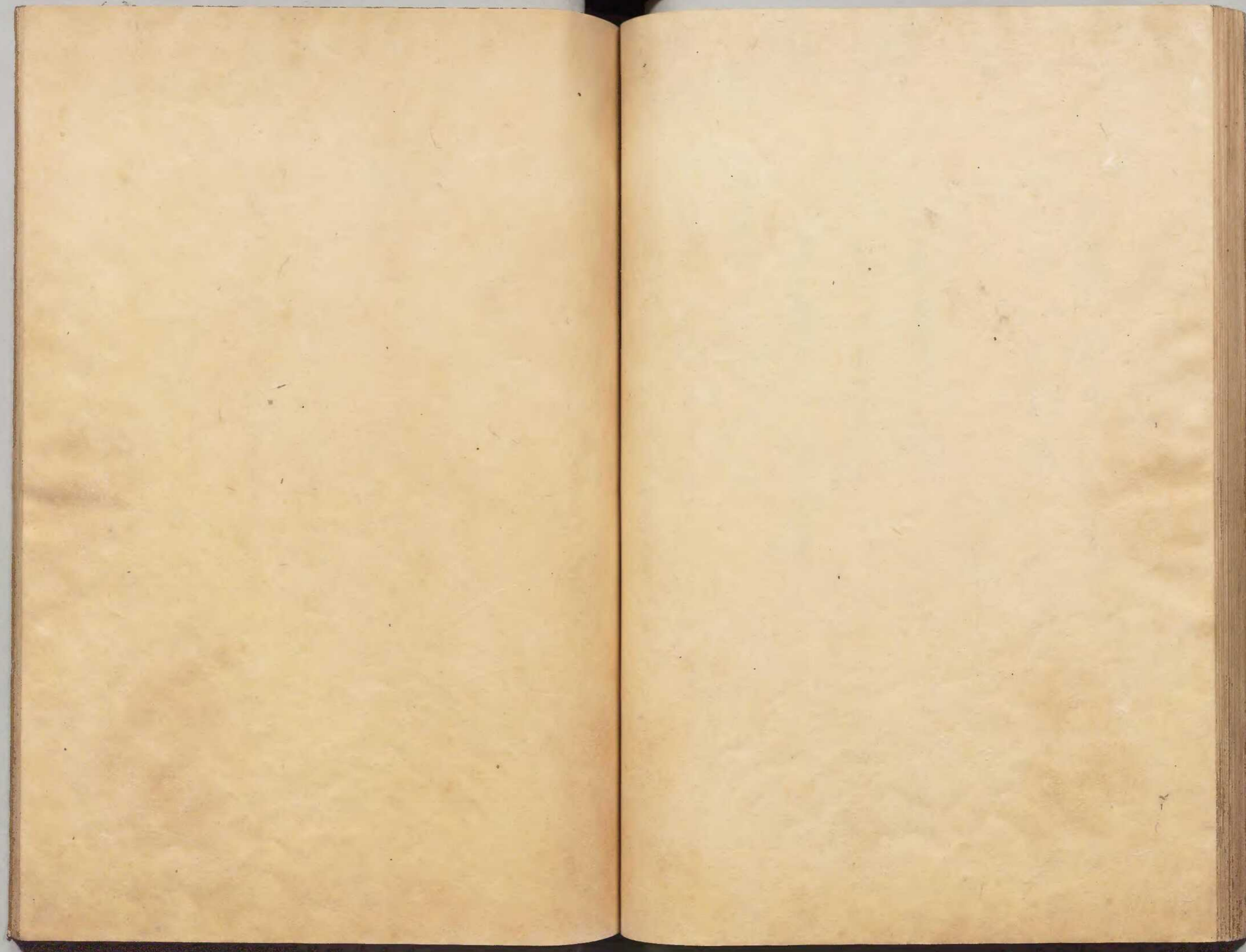
まね

寛永十七年

お軍家小治久長

家紋かぎお小治久長







石川 イシカワ

● 春重 ハルシゲ

そあ守 そあまのり

牛車三列

東照大権現へはく人も

春久 ハルヒサ

口部之部

牛車同部



大徳院小治久事

寛永元年二月廿五日病歿二十八歳

法名淨道

重久

田所長清

生玉武藏

寛永十二年二月

大徳院殿小治久事

大坂沙陣小治久事

元和五年十二月十日病歿二十八歳

法名道行

長吉

八木文

生國同前

元和六年

大徳院殿小治久事

寛永七年

將軍家八治久事



ふのりん  
家紋  
雪公源



石川

● 忠勝 ちか

三益

牛車之河

法石新世 かきしりしむら

ひらたのち  
廣忠卿小治子

忠吉 ちか

与三郎

丸良若清

牛車同家



東照大権現へはくもる

享和四年八月廿一日 病死八十六歳 法石道榮

忠久

傳七郎 九郎若海 生玉同系

台徳院殿

將軍家とねもる

法次

七郎傳門 生玉武列

元和九年

將軍家とねもる

法久

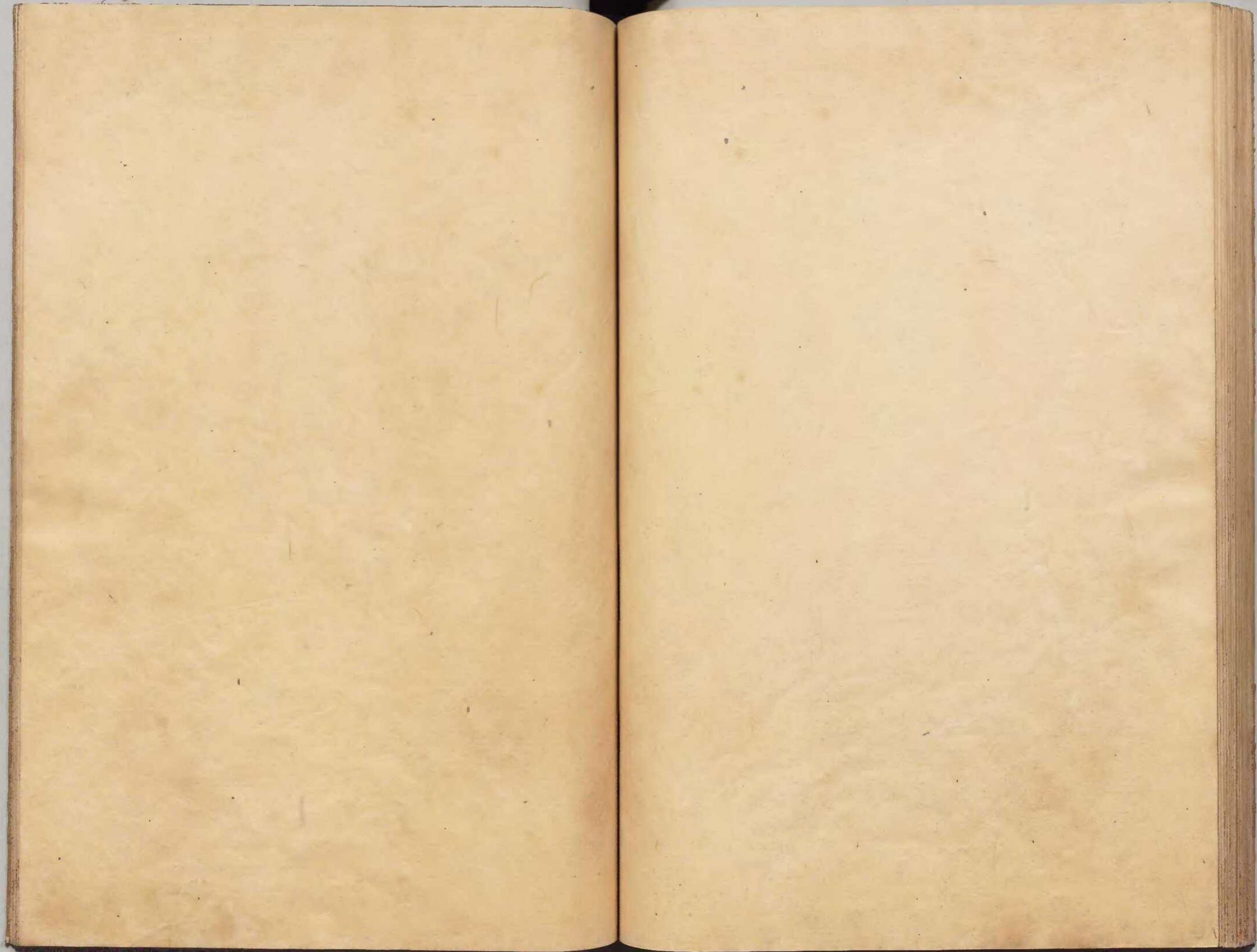
台徳院

寛永九年八月廿一日

將軍家へはくもる

家紋丸の目 雪根藤







石川

●  
安重

初七節

集三河

東照大権現小治久事

天正十五年病死

安重

初七節

生玉同安



大指規

台徳院殿へはくふ

元和七年一病死

安次

名は

名は

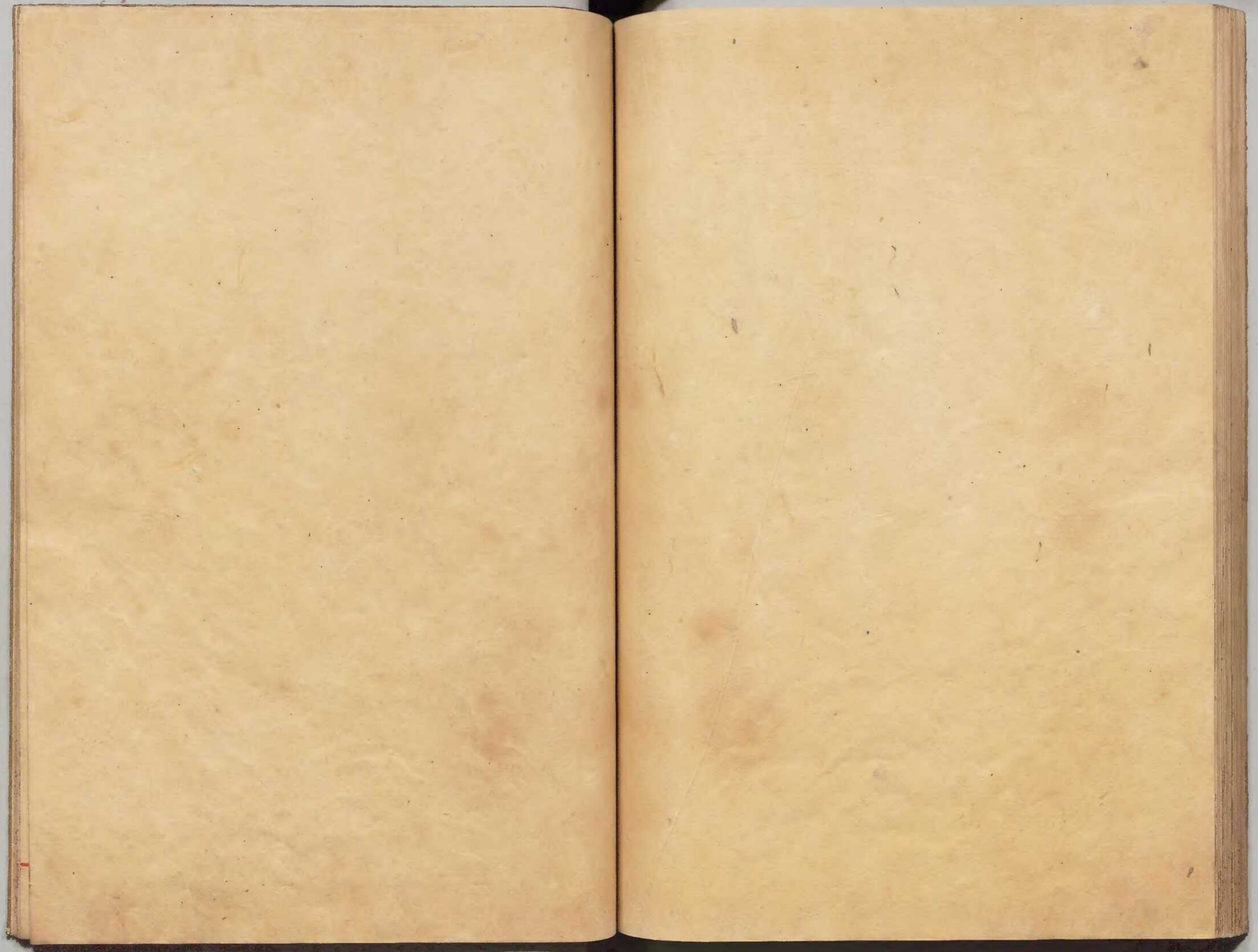
をりし十七年

台徳院殿

將軍家とて

家紋丸の目根藤







石門

● 京

古名古馬

牛國三列

東照大権現小治之寺

忠吉

長江寺

生玉回

白蓮院殿



將軍家よほくし

元和九年五月廿五日宛 宛三十一

志重 たしげ

右良太

中太

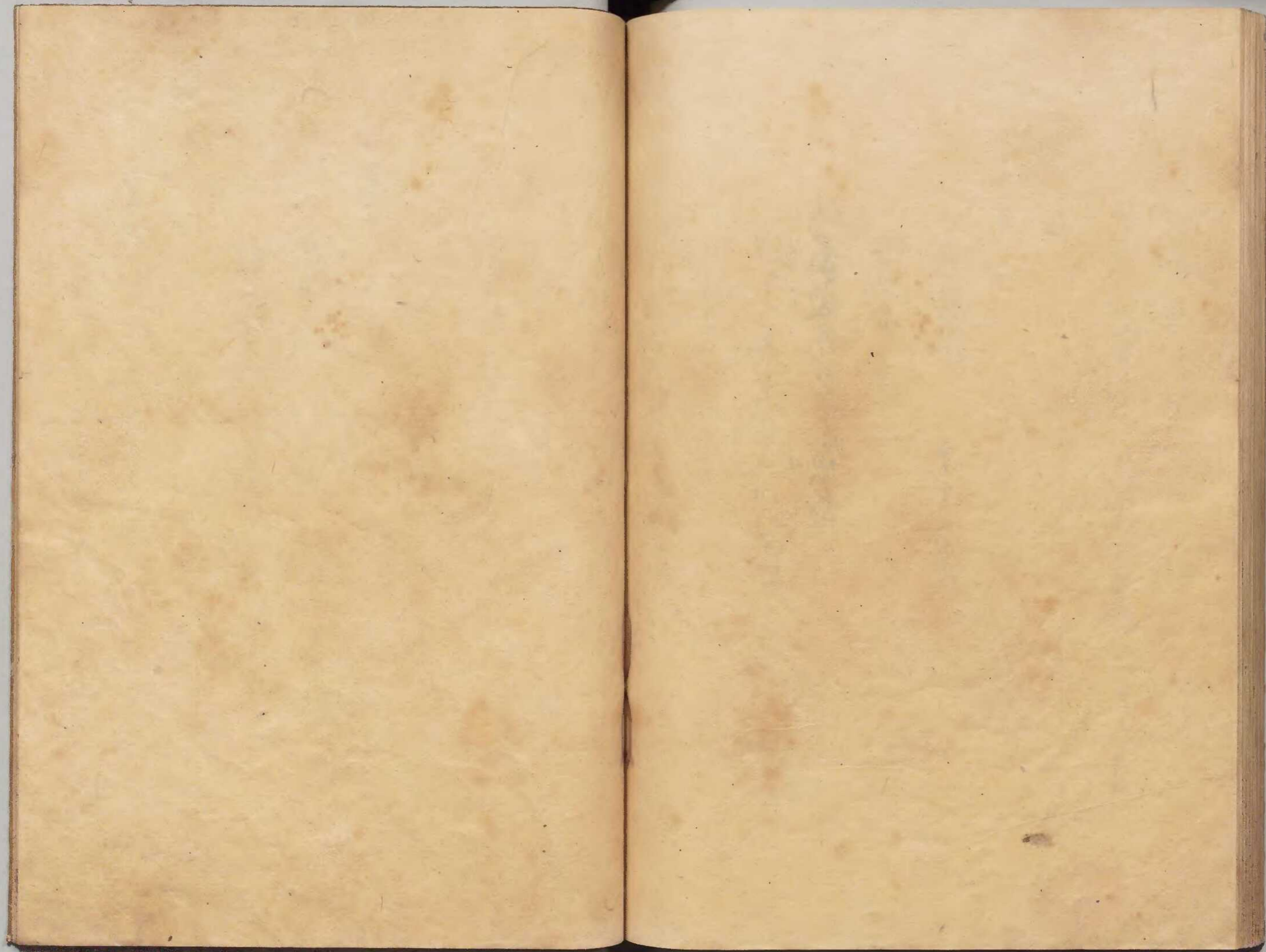
寛永七年

將軍家よほくし

同十一年二百人宛は増と宛宛一宛宛  
五百石余と宛

そのえん 家紋丸の内小根藤 ねがし







石川

● 系

式部卿  
清康君

牛山之河  
唐惠卿小治久

法石竹良

正重

七良大少尉

牛山之河



ひらき  
唐忠卿小治久之丞  
東照大指現小治久之丞

永正

与次右馬尉 生玉同家

大指現八治久之丞

元和二年正月病死五十六歳

法名淨喜

重正

与次右馬尉 生玉武藏

實ハ兼治御多文子なり。永正が養子となる

大指現

名徳院殿

將軍家へ仕へたる御家人

勝正

源光清 生玉同家

將軍家と御福一なる



家紋九の角小三葉以深

系

米津丸<sup>よふか</sup>生玉三列

法康若<sup>いらい</sup>廣忠郷

大指現小法久<sup>いらい</sup>生玉三列

系

小麦 生玉三列

法康若 廣忠郷

大指現八法久<sup>いらい</sup>生玉三列

元龜三<sup>いらい</sup>十二月才<sup>いらい</sup>生玉三列<sup>いらい</sup>三方原合

戦小討死

系

小麦 生玉三列

法康若 廣忠郷



大指現示法久々々々々々々々



